



2012年6月第一回目の鮎の遡上調査

川の水質の証は鮎の遡上
とはいってもEMに取り組んでも、なかなかすぐには効果が現れませんでした。加納さんは継続する意欲を維持するために、川がきれいになっていくという証がほしいと思うようになりました。そこで、EMの効果は農業では広く知られているから、まずは農業を視察しようと考え、愛知県内でEMを活用しているブドウ園やミカン園など、EMで品質の高い農産物を栽培している農家を仲間とともに訪ね、農産物を試食してみました。みなおいしかったことが実感できました。また、EMで同じく河川をボランティアで浄化している三河湾浄化市民塾の方とコミュニケーションをはかるうちに、EMの効果で矢作川（愛知県）の鮎の遡上の数が増えていること、三河湾へと流れ込む各地の河川では鮎の遡上が確認されていることを知りました。2009年に会を発足して以来、川掃除を欠かさず毎週2回実施し、ゴミを回収しているの、以前と比べてずいぶん、見た目はきれいになって、ゴミを捨てる人も少なくなりました。しかし水質の良しあしは数値上ではなかなか現れてきません。そこで一昨年、新川で鮎が実際に生息できるのかを試してみました。その結果、稚鮎は50数日生息できました。水質のBOD^{*}は鮎がぎりぎり生息できる基準でした。それで昨年鮎の遡上調査をし、新川の上流部で鮎を捕獲、専門家に確認したところ、遡上した鮎で間違いないとのことでした。そんな中、昨春秋、仲間が体調を壊したこともあって、仲間のために夢の鵜飼を実現しようと奔走。



鵜飼について説明をする鵜匠の皆さん



2013年6月7日11:00～鮎の遡上調査
2か所（新川と合瀬川合流地点および新川上流部）で実施

^{*}BOD(生物化学的酸素要求量)…水中の有機物の量をその酸化のために微生物が必要とする酸素の量であらわしたものと



川面を彩るうかいの篝火 友への愛と夢を実現した 河川浄化の実践 愛知県清須市 新川をよみがえらせる会 代表 加納祐一郎さん

「新川をよみがえらせる会」の代表をつとめる加納祐一郎さんは新川の浄化活動にほぼ毎日出かけています。加納さんにEMとの出会い、そして新川の浄化にかける想いをお聞きました。
加納さんは20年前、愛知県犬山市の入鹿池の湖畔で乗馬クラブの経営を計画。馬のし尿処理に、EMが有効と聞き、EMについて調べたことがEMとの出会いでした。しかし様々な問題で計画は中止となり、現在のスーパーマーケットの経営を行うことになりました。加納さんが仕事の一線から退こうと考え、第二の人生での生きがいを探索していた時に、子供の頃、よく遊び、なれ親しんだ新川の浄化を思い立ち、仲間を集めて「新川をよみがえらせる会」を2009年に発足しました。その時、川の浄化にはEMが一番だと従兄が勧めてくれたそうです。

新川の清掃活動とEM活動の継続
加納さんは二つの目標をたてました。一つは川の見え目をきれいにするために、清掃活動をして浮遊ごみを除去すること、もう一つは川の水質を良くするために、EMを導入することです。当時、新川の脇には染色工場があり、加納さんが町内会の役員になった時に、庁舎の会合で、川への排水の問題が議題に上がったことがありました。特に染色工場からの排水は色がついており、それが新川の水色を著しく悪くしていました。「色を抜くことは不可能だが、水質基準はクリアしているから問題はない」という企業側の弁明に納得ができず苦言を呈したことがありました。しかし、新川の浄化活動を始めた時に染色工場は廃業することになり、新川の水の色は徐々に本来の色へと戻ってきました。川は汚さなければ自然に浄化されるから、自分達ができることは、「自然が浄化するお手伝い」だと考えました。
EMを勧めてくれた従兄は水浄化関連の会社を営んでおり、新川の浄化をするならば、EMを使うべきとのアド



新川清掃活動の様子と旗の前に立つ加納さん

バイスと同時に、EMの培養装置である百倍利器^{*}を譲ってくれることになりました。これで、EMを大量に培養できることになり、年間1000トンのEM活性液を新川に投入しています。「EMによる水質浄化は安価に取り組めるが、利益主義の企業にとって、もうからない」という理由で取り組まないところも多いのが現実です。「これからの企業は理念が重要なことから、目先の利益だけで判断するのは間違っている」と加納さんは話してくれました。

^{*}百倍利器…EM1と糖蜜でEMを100倍に培養できる装置